

部会の設置および会議の公開等について

1 趣旨

(1) 滋賀県立高等学校在り方検討委員会について、下記3部会を設置。

普通科高校等部会	●普通科高校の在り方について ●学校の配置について などを検討
産業教育部会	●専門高校、総合学科高校の在り方について ●選ばれる「専門高校」「総合学科」にするために などを検討
多様な学習ニーズ部会	●通信制高校、定時制高校の在り方について ●公立高校が多様な学習ニーズに応えるための学びの仕組み などを検討

(2) 会議の運営については、附属機関の会議の公開等に関する指針 第2 公開または非公開の決定 (1)「公正かつ円滑な議事運営に支障が生じると認められる場合」に該当により「非公開」として実施

2 滋賀県立高等学校在り方検討委員会部会 構成

「普通科高校等部会」：10名

部会長	炭谷 委員 (滋賀県公立高等学校 PTA 連合会 会長)
部会メンバー	朝比奈委員 (特定非営利活動法人おおたき里づくりネットワーク) 門田 委員 (公募委員) 蒲生 委員 (日本ソフト開発株式会社 代表取締役社長) 小玉 委員 (株式会社たねや) 竹林 委員 (比叡山中学・高等学校長) 原 委員長 (佛教大学教育学部教育学科 教授) 吉岡 委員 (株式会社滋賀銀行) 吉嶋 委員 (滋賀県立甲南高等学校長・甲南高等養護学校長) 不破 臨時委員 (大津高等学校長・滋賀県高等学校長協会会長)

「産業教育部会」：8名

部会長	森下 委員 (公立大学法人滋賀県立大学人間文化学部 教授)
部会メンバー	岸田 委員 (滋賀県 PTA 連絡協議会 会長) 中井 委員 (一般社団法人ママパースポーツコミュニティ 理事) 中野 委員 (しがとせかい株式会社 代表取締役) 原 委員長 (佛教大学教育学部教育学科 教授) 池川 臨時委員 (八幡商業高等学校教頭／商業) 北村 臨時委員 (愛知高校・愛知高等養護学校長／工業) 野口 臨時委員 (湖南農業高等学校長／農業)

「多様な学習ニーズ部会」：8名

部会長	太田 委員	(滋賀大学教育学部 教授)
部会メンバー	生駒 委員	(滋賀県立野洲養護学校長)
	永浜 委員	(立命館大学スポーツ健康科学部 教授)
	原 委員長	(佛教大学教育学部教育学科 教授)
	福永 委員	(長浜市立高月中学校 校長)
	大林 臨時委員	(大津清陵高等学校長)
	曾我 臨時委員	(石部高等学校教頭)
	村中 臨時委員	(長浜北星高校・長浜北星高等養護学校長)

普通科高校等部会の開催概要

1. 会議開催概要

第1回	6月 8日（月）	◆ 普通科高校の在り方について
第2回	6月17日（水）	◆ 学校の配置について

2. 議論の要点

- (ア) ブロック内での役割・特色を明確にするために、統廃合という単なる縮小というイメージではなく、新たに学校を作り直す（再編する）イメージで進める必要がある。
- (イ) 学校規模の大小はそれぞれに良し悪しがあるが、小規模校が複数並存する場合、各校の特色化や機能分担、キャンパス制等の運営統合を含めた再設計が必要である。
- (ウ) 県教委が全体としての方向性を明確に示しつつ（マネジメントの発想）、具体的な個性化・特色化は各校の独自性を尊重する2段階の対応が必要である。

3. 発言要旨

(1) 第1回

- 学校の配置について
 - 全県域、各地域・ブロック毎に、学校の役割や特色を明確化する必要
- 学校の規模について
 - 規模が小さくなると、教育の質・中身が単純化されてしまう
 - 探究を深めていくために必要な学級規模を想定する必要
- その他
 - 通いたい、選ばれる施設整備が必要
 - 学校の魅力化は、各学校に任せることが重要
 - 生徒自身が将来、どういうことをやりたいのか、それには何が必要かということとを考慮して科目を幅広く選ぶことができる環境づくりが必要
 - 探究・体験活動を豊かにしていくことが学びの中心ではないか
 - 授業以外の業務の増大により、教員が忙しすぎる。「連携コーディネーター」などを配置し、教員が教育に集中できる環境づくりが必要

(2) 第2回

- 学校の配置について
 - 単に統合するのではなく、新しい学校を作るとイメージが必要
 - 各地域での学校、全県の中でシンボリックな学校の役割を明確化すべき
 - 県教委は、私学同様に公立学校が各地域・ブロックでどういう特徴を出して、

具体的に何をしていくのかというマネジメントを発信する必要がある

- 学校の特色毎に4つ程度のセグメント分けをしながら考えるとよいのではないかな。

○ その他

- 地域に通える学校があることは、子どもの地域離れを防ぐことにつながる
- 学校延命策ではなく学びの選択肢拡張の仕組みとしてのキャンパス制の検討
- 普通科は、もっと特徴を出して尖らすべきではないか（普通科という名称の廃止を視野に入れる）
- 県立中学校・中高一貫校の在り方についても併せて検討を進めるべき
- 教員数について、学級定員を維持して、教員数を維持することで教育の充実を図るべきではないか
- 勉強とスポーツの両方を頑張る子が通える学校を作ってはどうか

産業教育部会の開催概要

1. 会議開催概要

第1回	6月 4日（木）	◆ 専門高校、総合学科高校の在り方について
第2回	6月 17日（水）	◆ 選ばれる「専門高校」「総合学科」にするために

2. 発言要旨

(1) 第1回

- 専門高校・総合学科の学び場とは
 - 急速な社会の変化に対応しつつ、社会から求められる人材を育てる場
 - 大学や企業等、社会と接続するための場
- 専門高校・総合学科の学びについて
 - 卒業後の出口を見据えた教育が必要
 - 基礎的な学習・概念といった土台を身に着けることが重要
- その他
 - 専門高校がどういった学校か、保護者に伝わっていない
 - 保護者は、就職・進学実績に注目している
 - 学校の教員は教えるプロ、実践型な教育は外部の人と連携・接続しながら行うことがベスト
 - 学校と地域・企業との間をつなぐコーディネーターの存在が重要

(2) 第2回

- 選ばれる「専門高校」「総合学科」とは
 - 工業高校は、地元で就職先が選べるということ
 - 総合学科は、高校に進学してからいろいろなことを選択できる
- 「専門高校」「総合学科」に進学することへの不安点
 - 中学生や保護者に選んでもらう必要がある
 - 上位の学校（大学等）に学びを発展させることができる構造があるか
 - 卒業後、その先どうなるのかわからない
- 「専門高校」「総合学科」での学び・規模
 - 工業・農業・商業という括りを維持することで教育活動はしやすい
 - 場合により、併置という形ででも工業・農業・商業という括りを維持すべき
 - 工業高校は、8クラスから10クラスの規模がいいと思う。数がアドバンテージになる
 - 農業高校は、4～5クラス程度の規模が一番良いのではないか。3クラスになると規模が小さく、活気も小さくなる印象がある
- その他
 - 中学生時に進路を決めてしまうという怖さがある
 - 専門高校の魅力をいかに伝えていくのか
 - 学校にかかわる大人（OB・OG等）を産業界も含めて増やし、教育に関わることで魅力の発信やより専門的な学びの享受につながる

多様な学習ニーズ部会の開催概要

1. 会議開催概要

第1回	6月 3日（水）	◆ 通信制高校、定時制高校の在り方について
第2回	6月12日（金）	◆ 公立高校が多様な学習ニーズに応えるための学びの仕組み

2. 発言要旨

（1）第1回

- 多様な学習ニーズを必要とする子の増加
 - 特別に支援が必要であり支援計画を持つ子
 - 日本語の理解が不十分な外国籍の子
 - 人間関係のつまずきで進路変更せざるを得なくなる子
 - 対面で授業を受けられない子
- 子どもの課題と受け入れ側の学校対応のミスマッチ
 - どの子に照準を置いて授業すべきか、教員は苦慮している
 - 支援が届かない子は、授業もわからず孤立する
 - 大阪府のように、最初から明確にこういう支援が受けられる学校ということを提示した入試制度が生徒と学校の双方にとって良いのではないか
- 通信制の現状
 - 北部地域の生徒のうち、通信制に通う生徒は私立学校に通っているのが現状
 - 県立の通信制は天津にしかなく、スクーリングで通うのは大変
 - サテライト制の導入に加え、県が有する支援機関とのネットワークを活用した学びの提供が必要

（2）第2回

- 公立高校が多様な学習ニーズに応えるための学びの仕組み
 - 通信制・定時制といった単位制の学校でも、企業や作業所へのインターンができる柔軟な制度があれば良いのではないか
 - 外国籍の子が集中して支援を受けながら学べる学校があると、生徒も教員もお互いに良いのではないか
 - 通信制・定時制といった学びを支える学校は、社会との接点やセーフティーネットの最後の砦として、いろいろな背景を持つ子の学びを支える場である一方、教員の負担は大きい
 - オンラインでの学びの良さ・対面での学びの良さという両面の良さを受けられる高等学校があればよいのではないか
 - 人的にも限られたスキル・資源を集中させ、拠点校を設置した学びの支援を行う仕組みの構築が重要ではないか